

永井龍男
全集 三

講談社

短篇小説Ⅲ



永井龍男全集 第三卷

昭和五十六年六月二十日 第一刷発行

著者 永井龍男

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―二二二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

定価 四二〇〇円

装幀 原 弘

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tatsuo Nagai 1981 Printed in Japan

目 次

ある土曜日	166
虫	178
一　　個	206
若い鶏	218
みずかき	237
カステラ	262
もげたボタン	281
忘れ物	317
杉林そのほか	331
しりとりにあそび	345
鯉と鮒	363
傘のありか	385

ある友の会

.....

408

あとがき

.....

421

解題

.....

431

永井龍男全集

第三卷

枯　　芝

A

「おい、ちょっと来てみるよ」

庭の芝生に突っ立った夫が、妻に呼びかけた。

書斎であり、寝室であり、居間である古い洋室へ、なにかの用で入って来た若い妻は、

「なあに？」

と、窓越しに眼を上げた。

「……来てみる」

庭へ開いた、ドアまで出てくる妻には向かず、夫はいつていた。

周囲に松の多い、暖かい日向の庭である。

夫は四十を過ぎているが、妻は二十代に違いはない。

紅いサンダルを突っかけて、妻も芝生の日向へ出た。うす汚れのしたゴルフの球が、七つ八つその辺に転がっている。

煙草かなにかの空罐が、芝生の中に活けてあり、その中にも球が入っていた。

「あら……」

妻の視線が、夫の眼に添い、松の木立の向こうを見すかした。

小高い場所に立ったこの家を遠巻きに、古びた竹垣がめぐらされていて、垣の外は松林だが、黒い数本の幹の間に、なだらかな勾配の草原を見下ろすことができる。

洋室を取りまいた芝生には、まだいくらか青さが残っていたが、草原の雑草はもう一面に黄色かった。

「まあ……ワルツよ」

中年の夫の体へ、身を寄りかからせて妻がいった。

見るからに軽いコスチュームをまとった若い女たちが四、五人、見下ろす松林の幹越しにさまざまなポーズをつけている。ワルツが伝わってくるのは、草むらの中でポーターブルがまわっているからに相違ない。

いつも静かな、見馴れた草っ原が、思いがけない眩しさだった。

「雑誌の、口絵写真だろう」

「そうかしら。まさか、ピクニックじゃないわね」

「そう、あいつが写真屋だ」

ベレ帽をかむった男の手の中で、キラリと遠く、カメラのどこかが反射した。

「ウォームアップというところさ。これから、撮るんだよ」

夫は、足もとの球を集めながらいった。

蹴はきの若い女たちが、胸から空へ跳び立ったり、錐こしをもむように地に爪立つまだつのを、妻は見下ろしていた。曲が切れたと思うと、女たちはひとかたまりになり、ベレ帽の男を中心に打ち合わせを始めた。言葉の聞こえぬやりとりが、妙に子供めいた仕種しぐさに映る。

「若いね、みんな……」

庭と松林を仕切った竹垣は、どこもガタガタだった。芝生も、日当たりのよい処だけ厚く、隅々はすり切

れていた。犬の通り抜ける道が、紅葉の木の下から地肌をあらわし、竹垣にもところどころ穴が明いていた。松の根もとの枯草が日に透き、そこから見えた。

低い草原のバレーは、本格に曲に乗せてからは単調だった。

若い妻は、

「こうやって見ると、古い家なんだなあ……」

と、自分たちの住みかを振り仰いだ。

「三、四十年前に、夏場だけくるために作ったんだそうだもの」

慎重に狙いを定めて、一つ二つ球を転がしながら、夫は呟いた。罐の縁をクルリとまわって、仕込まれた生きもののように中へ落ちるものもあり、走ることに興味を失って、途中で気を抜いたかのように、停まってしまう球もあった。

「バレーやってる辺、沼地だったんですって？」

「いまだって、そんなもんさ」

近所に家のないのも、そのせいだった。

持主はよほど前から売りに出している。いつでも出る約束で、この夫婦は三月ほど前からここに住んでいる。

「ああ、あ。東京へ行きたい。一時間経てば、銀座を歩いているんだわ。ね、行かない？」

「行かないね、当分……。一人で行ってきてもいいよ」

「嫌！ 帰ってくると、不機嫌な顔なざるくせに」

眠い小禽のふくれた羽毛のように、朝のもののうさの抜けきらない若い妻の表情に、一瞬精気が湧いた。同じ寝床から起きて、まだ一時間も経っていない。茶の間の食卓の、朝食の後片付けも済んでいないはずだった。

「また肩が張るの？」

「うん」

「もう、それ、おやめなさいよ。なんべんもなんべんも、おんなじ処を転がしていると、かんしゃくが起こつてくる。あっちの道具持つてきて、いつかのように、思い切つてすつ飛ばしてごらんなさい！ 肩だつて癒なほっちゃうから」

夫は、パターを芝へ軽く捨て、首のつけ根を左右に折った。

「新聞、持つてきてくれ」

「あすこに、置いてあるわ」

若い妻は、顎あごで洋間を指した。

「……いっしょに踊つて来てやろうかな」

両手を空へ伸ばして、伸びをする妻を後に、夫は新聞を取りに行く。そして、洋室の外に出ている籐椅子を鳴らして腰かけた。

「東京へ出るの、あなた、まだ怖いんじゃない？」

「ばかをいえ。あの仕事を仕上げてからでなければ、出て行つたつて面白いことはない」

「そんなら、のんびりしないで、早く仕上げてよ」

夫は黙つて、新聞をひろげた。

夜になって洋室の窓をのぞくと、ピンで止めた大きなケント紙に、図を引く夫の姿を、スタンドのシェードのかげに見ることがある。それがこの男の職業であつた。

若い妻が、小一時間もしてからふたたび洋室へ顔を出した時、夫は新聞紙で胸から上を覆い、芝生の上に仰向きに寝ていた。

ここ一週間ばかり、よい天気の日この男の習慣のようになっていた。

B

……その翌日も、夫は芝生の上に寝ていた。

この一軒家まで、坂道を上ってきた御用聞きたちは、すぐ引返しては行かなかった。

町から来た若者たちは、若い妻と無駄話をして行くことに、このごろ興味をもっているようだったし、若い妻の方も、自分に惹かれる若者たちを、操ってみるのが面白いらしかった。薪を割らせたり、干し物を取り込ませてから、いっしょに茶菓子をつまんだりする。

肉屋の御用聞きが帰ってから、紅茶の茶碗を盆にのせて、若い妻は洋室へ行った。

「……眠っていらっしゃるの？」

サンダルを突っかけながら、大型の雑誌で顔を覆った、芝生の上の夫に声をかけた。ジーンズのスボンの裾を捲き上げ、オリイヴ色のスウェーターを着て、腰がくびれていた。

「ねえ、眠っているのったら！」

「いいや」

二つにひろげて、顔にのせたグラフを、夫は払いのけた。日焼けした顔だった。

「はい、紅茶」

と、夫の脇に妻も腰を下ろした。

「きのうの、女の子たちね？ 新映のニューフェイスだそうよ。煙草屋の二、三軒先きに、山田さんて家があるでしょう？ あすこで、着換えしたんだって」

夫は上半身を片肘で支え、紅茶のさじを使った。

「御用聞きなんて、早いもんね。驚いちゃった。……うちのことまで知ってるのよ」
ちらりとのぞき込んでくる若い妻の視線を、夫は上目遣いに見つめて、

「なんだ、うちのことって」

「亜里子ありこさんのことよ」

別れた前妻の名が、ひょっこりそこへ出た。

「……ここから帰る時、ポロポロ涙をこぼしながら、坂を下って行ったそうよ。肉屋の小僧が、途中で逢って、びっくりしたって」

「御用聞きと、おしゃべりするのは止めてもらいたいな」

「だって、ここにいたら、あなたのほかに誰と口をきくの？」

亜里子に弟子入りしたことのあるこの若い女が、半年近く別に囲ってであると分かって、夫と亜里子が離婚したのは、ここへ越してくる前だった。

亜里子は銀座に店を持つ、有名なデザイナーだった。三つ四つ年下の夫は、結婚以来すべて亜里子の収入に頼って生活してきた。設計家として、多少とも名前が活字になるようになったのも、機会あるごとに亜里子が梶を取ったからである。

いよいよ別れると定まった時も、手切れ金のようなものは、亜里子の方から出た。亜里子にも、病死した先夫の子供が二人あったが、二人とも大学生だった。

亜里子は一月前に渡仏したが、フランスへ発つ二、三日前に、突然この家へ訪ねてきた。まだ、つい先日のことである。

運転手らしい者に、一抱えほどの荷を玄関まで運び込ませると、亜里子は応対に出た若い妻を無視して、つかつかと洋室へ通った。ひとみかみ

その時も、庭でバターの練習をしていた夫と、しばらく上下で睨み合う形になったが、亜里子はストッキングのまま芝生へ下り、強引に別れた夫の髪をつかむと、

「こいつが、こいつが……」

と、前後に引きまわした。

相手のなすままに、夫は膝を突き、ただ芝生に顔をすりつけられるのだけを使った。

家の中を突き抜けるように、亜里子はそれなり外へ出て行ってしまった。

二十年に近い結婚生活が、それで完全に終わった。思い残すことなく、亜里子は渡仏するつもりだったのである。玄関に置かれた洋服箱の中には、別れた夫の靴下とか、水着の類のような、他の品にまぎれて離婚の際に渡せなかったような細々とした品が、ぎっしり詰まっていたということである。

「あなたこそ、毎日ここへ寝ころんで、パリの亜里子さんのことを思い出しているんでしょ」

「つまらないことをいうな」

「思い出さない？ そんなら思い出させて上げる。……こうよ」

と、若い妻の片手が、夫の髪の中へうずまつた。

「こいつが！ こいつが！」

小声に力を入れ、夫の頭をゆする。

「まだ、なんかいったんでしょ。教えて。え？ 教えない」

「よせ」

引き寄せられて、おもちゃにされる頭の上の手を、夫は気弱に払った。

「どうしてあなた、あの時無抵抗だったの？ まるで、なんにもしないの。意気地がないったら……」

夫は片手で頰杖を突き、晴れた松林の空を見上げていた。

「なにをいっても、返事をしないな。よし！」

つと、若いスウェーターの胸が、臥ている夫の胸へ落ちてきた。

身を反り返らせるように、ぐいぐい押してくる若い妻を、受止めようとした夫の腕が、思わぬ方へ紅茶茶

碗を転がした。

「……血圧を、計ってみなくっちゃ、いけないんだがな」

押され押されて、下から夫はいった。

「うん。東京へ、計りに行こ！」

「どうしてそう、東京へ出たがるんだ。逢いたい男でもいるのか」

「そうよ！　なんだ自分こそ。花のバリーの、浅草でエイだ」

「花のバリーの、浅草だって？」

「そお、関ちゃんせまの口癖。逢いたいな、関ちゃんに……。ああ、暑い」

夫の胸もとに両手を突っ張り、悪戯せまそうな若い妻の眼が、すぐ下にある夫の眼を見つめ、共通の知人の名らしいものをいった。

「暑いか？」

「暑いじゃないの、背中が……。日向でこんなことしてれば……」

「誰が、こんなこと始めたんだ」

「あなたよ。あなたが、あたしを相手にしないから」

「よし、涼しくしてやる」

夫が若い妻の両手を胸から外したと思うと、妻の着ているスウェーターの中へ、素早く自分の手を入れていた。

「ああ、ごめんなさい。くすぐったい！」

と、身もだえする細い体から、オリウ色のスウェーターが、下着といっしょに無理やりに剥むき上げられる。先きをめくり上げたジーンズのズボンごと、下半身は夫の脚に挟みつけられている。

「もういい。ごめん、ごめんなさいってば」

騒がせるだけ、自分の体の上で騒がせてから、夫はひよいと芝生あぐらに胡坐をかき、抱き上げた若い妻の白い